九州大学学術情報リポジトリ
Kyushu University Institutional Repository

朝鮮通信使と石川丈山 : 「日東の李白」考

若木, 太一
長崎大学教養部助教授

https://doi.org/10.15017/12045

出版情報 : 語文研究. 52/53, pp.65-80, 1982-06-10. 九州大学国語国文学会
バージョン :
権利関係 :

朝鮮通信使と石川丈山

――「日東の李白」考――

若木太一

一　「日東の李白」

秋水一斗もりつくす夜ぞ　　芭蕉
日東の李白が坊に月を見て　　重五

貞享元（一六八四）年の初冬、「野ざらし紀行」の旅の途中、名古屋に杖を休めた芭蕉は、荷兮・杜国・野水・重五・羽翌といった土地の俳人に迎えられ、のち『冬の日』に収められる五歌仙に客座している。

これは、その最初の〈狂句こがらし〉の巻の月の句。夜長を刻む水時計の「秋水一斗」を酒に転じ、「日東の李白」と称された詩人の坊屋での月見の宴が映し出されている。杜甫の「李白一斗詩百篇」（飲中八仙歌）の詩句をふまえた、「古風」（中村俊定氏『芭蕉句集』古典大系）だが、詩的風韻へのあこがれといったものをあざやかに反映した付句である。芭蕉の前句の意図は付き過ぎるほど充分に受けとめられている。延宝・天和期の、直截の詩句の剔出といった漢詩文調からはすでに離れつつあるが、なお、それの風俗化した雰囲気は濃厚である。

ところで「日東の李白」とは、いうまでもなく洛北一乗寺に隠棲した石川丈山の面影がこめられている。この称が一般化するについては、寛文十一（一六七一）年三月刊の『覆醬集』上下巻二冊（のち上下巻合冊して覆刻版もある）の流布によるところが大きい。すなわち、講習堂松永昌三の序文に「異客之推弁欽服、称日東之李杜」とあるのがそれである。のちに山口素堂が詩仙堂を訪れて「先尋日東之李杜」（『素堂家集』）などと詠ずるのも『覆醬集』への親炙を思わせる。

丈山の詩名を「日東の李白」と高からしめたのはこのように『覆醬集』に他ならないが、これは講習堂も記すように朝鮮の「異客」の批評にもとづくものであつた。

丙子の年朝鮮の詩学教授権伐といふ者来朝す。君往て之に遇ひ、楮國毛生をして共に晤語せ使む。伐言談の餘、詩巻を取りて之を讀む。讀み了りて竦然として舌を縮て嘆じて曰く、君は廼ち詩家の正宗なり。文は或は勤讀する者之を能せん。詩は天生の清格に

非ざれば為すこと能はず。古人楊伯起を以て関西の夫子と為す。君を以て日東の李杜と為すは妄に非ざるなり。實に言を知るなり、と。

（『覆醬集』序、原漢文）

これは後出する「與朝鮮國権學士菊軒筆談書」（私に番号を付した）⑮の権伺の言をふまえた部分である（76 77ページ参照）。丈山が朝鮮通信使一行の製述官菊軒権伺と会見したのは寛永十四（一六三七）年一月十八日であり、「日東之李杜」の名はこの日の権伺の言に由来することを昌三は言明している。この丈山と権伺の筆談の内容は『丈山筆語』（神宮文庫蔵本は原題簽を欠き、貼題簽にこのようにあり、今これに従う）唐本製大本一冊（天和二壬戌孟秋上澣日／雑邑書叢丁字屋源兵衛新刊）として公刊されている。すなわち『覆醬集』刊行より後れること十一年である。さらに、下って正徳元（一七一一）年六月に本書は再刊（正徳元辛卯年林鐘吉辰／田中庄兵衛寿梓）されている。[1]これは、天和二年、正徳元年ともに、慶長十二年から日鮮修好が回復して以来、第七次、第八次の朝鮮通信使が来朝しており、これにあてこんだ出版であることは明らかである。

講習堂が『覆醬集』序で述べた「日東之李杜」の評言は、『丈山筆語』の公刊によって裏付けを得て、その当否は別としても、世俗での評価を確かなものとしたのである。同じく「與朝鮮國権學士菊軒筆語」は、石克子復（石川孫十郎）編『新編覆醬續集』（延宝四年刊）巻十六に収録されているのであるが、こちらは大部なもので、その影響力は単行本の前者に比べて、それほど大きかったとは思われない。

ところで、『丈山筆語』と『覆醬續集』とではわずかながら措辞などに異同が見られる。また、これら刊本のもとになった自筆の原翰についても報告のあったことをきかないので、静嘉堂文庫に所蔵されるそれを紹介するとともに、筆談・唱酬における丈山の立場など明らかにしたい。

二　丈山・権伺の筆談までの経過と背景

寛永十三（一六三六）年来聘の朝鮮通信使は、正使が通政大夫任絖（号白麓）、副使が金世濂（号東溟）、従事官が黄㦿（号青丘）、読祝（製述）官が吏文学官権伺（号菊軒）、その他訳官、書記、写字官、画工、医師、武官、楽人、馬芸員など随行し、下官など含め総勢四七五名であった。[2]

慶長十二（一六〇七）年に対馬の宗義智の努力によって日鮮修好が成り、徳川時代最初の回答使が来朝して、その後元和三（一六一七）年、寛永元（一六二四）年に続いて、第四次の通信使来朝がこの時にあたる。前の三回は、秀吉の朝鮮侵略、いわゆる文禄・慶長の戦中戦後に、日本へ連行・拉致されたおよそ七万五千人に及ぶ俘虜刷還と国書回礼を主目的とする回答使であったが、この年に至って、はじめて奉平の賀のために「朝鮮通信使」として来朝したものであった。この前後から幕府がとりはじめた海外渡航禁止、貿易制限、キリシタン弾圧といった厳しい外交政策は、平戸を閉鎖し長崎に出島築造、寛永十四年の島原・天草の乱に至って頂点に達するが、このような鎖国政策の渦中にあって、朝鮮（明・清との交易も含めて）との責極的友好を進めてきたことについては、明らかな外交転換がうかがえる。西洋への窓口を極端に狭め、東洋を受け入れようとする姿勢である。このような情況の中で、慶長十二年に始って文

化八(一八一一)年に至るまで十二次にわたる信使来聘が行なわれ、徳川時代を通じて両国の平和な関係が保たれた。近代以降の不幸に比べて、貴重な一時期である。

しかし、ここに至るまでのそれは、『通航一覧』巻二十四～二十七に輯録された修好始末の記事に明らかなように、秀吉軍撤退後の朝鮮、明、および日本をめぐる三国の内政問題、外交上の微妙な関係を背景に見て、それに当った対馬宗家の、時には国書の改竄(柳川事件)などまでをやってのけての、危うい国交回復であったことがわかる。

秀吉の侵略の傷跡は、釜山や漢城のみならず、戦時に連れ来たった多くの在日俘擄朝鮮人や京都の東山にある豊国神社前の耳塚といった具体的な存在として残されており、通信使の来朝ごとに、その残虐ぶりはくり返し確認されたわけである。このような痕跡として残る日本人の性向に対する不信を解くために、徳川幕府が国力をあげて信使の歓迎・饗応に努めたようすは、(習慣の違いなどによる対応上の行違いや誤解などいくらもあるが)同じ『通航一覧』巻四十八～八十に見える信使参向道中、信使聘礼、営中御饗応などの記事から知ることができる。五、六百名にものぼる信使一行の道中は、江戸への往還に延々四ケ月(朝鮮からの旅程はのべ六ケ月程)をかけている。その間、道筋にあたる九州や瀬戸内の港、東海道の各駅をもつ藩は、接待のための休憩所や宿泊所を設け、格別の食事などを準備しなければならず、多くの人を動員し、出費を要している。のち、経済的負担が藩財政を揺がすような事例もあって、質素に迎えるべきとの献言がなされたほどであった。幕府は中国、オランダを「通商の国」とし、朝鮮、琉球を「通信の国」として対応しており、とりわけ朝鮮には丁重な盛儀と歓待を尽しているのである。

右のような幕府の修好・善隣外交の歴史的経過については、一七、八世紀の東アジアの情勢を展望しての詳論が備っているのでそれにゆづり[3]、ここでは、当面の石川丈山が接触をもった寛永十三年次の通信使のことについて記しておきたい。

『通航一覧』巻四十八信使参向道中の記事、およびこの時の正使任絖の「任参判丙子日本日記」、副使金世濂の「金東溟海槎録」(『海行摠載』巻二所収)、同じく金世濂の「金東溟槎上録 李澤堂批評」[4]、従事官黄㦿の「黄漫浪東槎録」などの日本紀行によれば、次のような行程であった。

崇禎九年八月十一日漢江から船で発ち、水行・陸行して九月六日釜山に到着。ここで対馬から派遣されている倭館の平成春(烏川式部)ら倭人と国書について検討を重ね、一行を整備して十月六日(以上は朝鮮暦による。以下の日付は日本暦で表わす)即ち日本暦で十月五日に釜山を出航して、同日午後五時頃上対馬の西岸佐須奈浦に着岸した。七日鰐浦、九日西泊。十日金浦を発って十一日対馬島主宗義成及び京都の五山から輪番で以酊庵に派遣されていた通事役の召長老、璘西堂(東福寺の陰召東堂、玉峯璘西堂)らに迎えられ対府着。十一日後の二十三日対馬を発ち、二十四日壱岐の勝本に寄港船待。二十六日発ちその日築前の藍島(相島)着。二十八日朝発ったが中洋に到って「水勢洶湧。帆檣傾側。波濤入舟。幾至危域。船上之人。莫不眩倒失色」(『黄漫浪東槎録』)という。玄海灘から響灘は荒れる海である。倭船に牽引されて小倉に立寄り、長門の赤間関へ向う。二十九日は夕方発って船に宿し、十一月一日周防の上関、二日津和、三日安芸の鎌刈、四日備後の鞆津、五日備前の午

窓、六日播磨の室津。七日も同港に留り、八日明石を通過して摂津の兵庫に到る。九日、蘆屋を過ぎて午後二時頃淀川の河口に到る。ここからは朝鮮船は川底が浅くて入れないので「樓船」に乗り替える。朝鮮船は河口に繋置され、ここから樓船で上って第七番目の大橋（難波橋）の下を過ぎて上陸し、旅館の西本願寺へと向うのであるが、『金東溟海槎録』には「樓船八九隻乃小船數百艘。出迎河口之外。自前使行。…船上設小樓。粧以黄金。圍以綉幕。窮極奢麗」と記されている。道中の様子は「街頭横分如井字。……毎一間懸一燈。観光之人。千萬為群。不敢出聲」という。『東槎録』にも「赤脚俯伏。不敢出聲。燈光燭影之下。但見其禿頭而已」といい、『日本日記』にも「皆列坐成行、絶無喧華之聲。其厳束可知」と大群集の静かな出迎えの様を印象深く記している。以後、おおむねかくのごとくであった。

十二日まで本願寺で休養した。これより以降、詩文や書画を求められることのはなはだ多くなったことが記されている。「自到大坂以後。諸倭官求詩文書畫者坌集。學官寫者畫員等應酬。日不暇給」（『東槎録』）といい、「倭人求書畫者。日夜坌集。朴之英趙延玹金明國。不勝其苦。金明國至欲出涕。倭人最重全榮書法」（『海槎録』）というすさましさだった。その後、十三日枚方、十四日淀、十五日午後四時頃京都に入り、本国寺を旅館として四日間逗留し、二十日午前八時頃京都を出発している。この間、十七日には京都所司代板倉重宗が訪れたので信使は俘擄刷還のことを申し入れている。これは、この後江戸で奉行堀田加賀守宛に差出された「崇禎九年八月十一日　朝鮮國禮曹參判朴明榑」[5]の文書と同様のもので、近畿一帯の在日俘擄朝鮮人の刷還を京兆尹へ対して要請したものである。十五日京入りした時の任絖の『日本日記』（朝鮮暦で十六日付）には、淀から一行を迎える大群集の中に朝鮮人俘擄を見い出して次のように記している。「――其中勿論男女。往往合手而祝。鞠躬致敬。或頻頻拭涙僕僕望拜者。皆我國被擄人也。自淀浦至倭京本國寺三十里間。所見必不周徧。而其數一百七十人中、男子只二十三人。何其男少而女多耶。壬丁兵乱被創之數。男子係来元多而然耶――」と。信使の来朝を喜び、しきりに涙をぬぐっては辞儀をする朝鮮人を任絖は残らず故国へ連れ還りたいと考えているのである。

京都からは陸路となり、大津、守山、八幡山を通り、二十一日佐和山、今須。二十二日大垣、墨俣。二十三日名古屋に入り大光院に止宿。二十四日鳴海、二十五日岡崎、赤坂、二十六日吉田、荒井、二十七日浜松、見付、二十八日掛川、金谷、二十九日藤沢、駿府、三十日清見寺、吉原をへて夜深く三島着。十二月一日大雨で逗留し、二日箱根、三日小田原、大磯、四日藤沢、五日神奈川、品川、そして六日江戸に到着し、馬喰町の本誓寺を旅館として滞在することになる。翌七日、幕府上使土井大炊頭、酒井讃岐守が本誓寺へ来て挨拶し遠来の使者の労をねぎらった。

十二月十三日朝江戸城に参り泰平を奉賀し、朝鮮王李倧よりの国書、進物を献じ、儀式を済した。ところが、この間には種々の問題があった。それはほとんど羅山が起したもので、たとえば三使より訳官の洪喜男が嘉善大夫で上位なのに従官となったのはおかしいとか、信使らの将軍の拝謁を秀吉の時聚楽第に使節が来た時のように柱を隔てて使臣の礼を尽せとか、幕閣を含めての朝鮮に対する優位を誇示しようとする態度があらわに出て、信使の反発を招いたのである。また、将軍家光は通信使来聘に先だって日光東照宮の大修建

を行っており、豪華絢爛の社殿への参詣を要望している。宗義成を通してこれを伝えると、三使は国命を請けていないと肯わなかった。双方に混乱と紛糾を招いたが、高麗朝の使節が筑紫の観世音寺に遊覧した前例もあり、国書伝達の速やかならんことを条件に招待を受諾したのだという。(6) この日の朝鮮聘礼については『大猷院殿御実記』巻三十三に詳しく記録されているが、右のような紆余の内実は記されていない。

十二月十七日、三使を含め二一七名（一六九名は江戸留）で日光へ向い、二十一日雪の中を登山拝廟。ここで求められて詠じた三使の詩十六首が『東照宮社縁起』の中に残されているという。(7) また、『金東溟槎上録』にも〈日光寺〉と題する七律四首が収められている。この時、三使に代って権伝が詩を詠んだものもあり、これらに羅山が和している（「和朝鮮三使日光山中詩并序」『羅山詩集』第四十七、外國贈答）。日光参詣はこの後寛永二十年、明暦元年までで以後は中止された。

二十四日午後、一行は江戸へ帰り、二十九日には帰国のため江戸を出発した。この間、二十七日付で朝鮮国王宛の信書を羅山が起草している（『羅山文集』第十四、外国書下）。また、権伝や文弘績と筆談・唱酬したのもこの滞留中である（『羅山文集』第六十、雑著五）。これらの筆談では、朝鮮の官制や歴史上の疑点にまで質疑に及んでおり、外交使節に対して非礼かつ非常識なものがあった。これについては堀勇雄氏『林羅山』（吉川弘文館、一九六九・六刊）でも言及されているので内容については省略するが、家光にたしなめられる程の実質のない知識をひけらかすようなものであった（『大猷院殿御実記』附録巻五）。

帰路もほぼ同じコースをたどり、年を越して一月十五日に京都に入って、十八日まで本国寺に逗留した。この折に丈山と権伝の筆談が行なわれたのであるが、それは後述する。

十九日朝京都を出発し、二十日大坂着。二十五日楼船で淀川を下り、河口で朝鮮船に乗移り、帰国の航海へと発った。風のため、出航したのは一月三十日であった。

二月十四日対馬着。同二十三日ここを離れて、二十四日（朝鮮暦で二月二十五日）午後六時頃、荒波の中を釜山の近くへ帰り着いた。

すでに六ケ月が経過している。迎えの者が船上に来たって引接し、国情の変化を告げた。信使一行が日本へと往還していた間に、朝鮮は清の太宗に進攻されていたのである。朝鮮王は江都を出て南漢城にたてこもって抗戦すること五十日であったが、一月二十四日に江都も陥落し、三十日には王も城を出た。明から清へと、宗主国の変更を余議なくされたのであった。任絖は『日本日記』を次のように結んでいる。「――始詳清騎犯京辭縁及東殿竟有行之擧。五内摧裂。只自痛哭而已。下陸之後。東萊府伯及水使。并迎見。握手相慟。夜分始罷。對馬島鰐浦抵釜山四百八十里――」と。

新しい政情不安については金東溟『海槎録』にやや詳しく述べられているが、日本往復の概略はほぼ右の通りであった。航路については対馬の船が外海、内海とも先導、護衛し、港や陸路の旅館では、大名たちがほとんど藩の総力をあげて饗応・歓迎を尽した。道中六ケ月間、宗義成をはじめ対馬の儒員・通事らがつき従って、できるだけ両国の友好のために誤解や遺漏のないように努めている。

石川丈山が、以上のような両国の関係を背景において、通信使と

筆談・唱和に及んだのは一月十八日のことであった。信使一行が滞在した日蓮宗の本国寺は堀川通松原にある。

「坊舎百二十餘宇、寺家繁多他寺にこえたり、故に琉球、朝鮮人等来朝の時はこゝにて饗應有りとかや」（『出来斎京土産』巻二・延宝二年刊）という。

この日丈山が本国寺を訪れたのは、板倉重宗の家臣都筑吉保が米饌や下程の諸品を届けた折に同行したものと考えられる。京都の饗給は板倉重宗が担当し、岡部美濃守宣勝、藤林市兵衛、木村宗右衛門が往復とも事にあづかっていた（『通行一覧』巻四十八）。任絖『日本日記』には「前来饌已盡。周防守又送下程諸品。令受之。吾日供餘米。則分給行中難苦之役者五六名。使自此永以為式」と記されているのみである。筆談の相手の権伜の日記が残されていないのは遺憾という他ないが、金東溟も黄㵎も、丈山についてはいっさい記すところがない。それは当然のことでもある。読祝官（製述官）ら、上上官以下の者の役目であって、正使や従事官に直接面会できるはずもないのである。ちなみに、この間の三使節の日記の内容をのぞいておくと、次のことが記されている。

十五日――午後大津から京へ到着。重宗が人をつかわして一行を迎え米饌を下程、別に饌物を呈された。

十六日――紀州大納言から猪、鯨肉など呈された。洪喜男を重宗の所へ遣わし、俘擄刷還について返事を求めた。それによれば、九州、四国、幡磨、摂津など、一人も帰還の希望者はないという。京、大坂は二度も捜索をくり返したが、老たる者はすでに死に、壮年者もすでに老い、子や孫がいて彼らを置いて帰国することはできないという。ただ、対馬太守が周旋する百餘人、あるいは四、五十人は帰還できるかという。

十七日――大福寺の僧壽仙が訪問。彼は明年から対馬の文書官となる者である。やむを得ず任絖も面会した。壽仙は硯具を三使に献呈したが三使ともに辞退。任絖はこれを権伜に給した。

十八日――金東溟の部下三名が十日ほど前から痘疫で病んでいたがついに死んだ。医師賢冶が副使のところへ来た。また、宗義成と召長老、璘西堂が来た。前に届いた米饌が尽きたところに、重宗から食料などが届けられた（前掲の引用『日本日記』参照）。

十九日――朝食後、雨の降る中を出京して淀へ向った。

三使の日記でも分る通り、最重要なのは俘擄刷還のことである。重宗は寛永十四年正月十九日付でこれに対する書翰を届けている。

「――且所求之俘虜、前因悉刷還無有孑遺焉、雖有存活者、其末裔庶孽者、而各土着親睦、無郷念之動、曼乙或願還者、須在陀期――」（『通航一覧』巻四十八）という返事であった。前出した江戸での刷還要請の公式文書に対しても、幕府の代表ともいうべき堺田加賀守からの、ほぼ同様の書翰が朴明榑宛に出されている（『同書』巻百四）。すでに寛永元（一六二四）年の通信使来朝の折にも一四六人をともなって帰国したのであるが、その時の副使姜弘重の『東槎録』に記されているように、訳官の康遇聖（寛永十三年次も来朝している）が大津の人との話で、李文長という朝鮮人が京都にいてトを売って食し、被擄人を恐喝して帰還しても益なしと遊説するという話を聞いてもいる。黄㵎の『東槎録』二十四（日本暦二十三日）日大坂にての記事に「被擄人或有到門外者。而無一人願歸。中有一漢。自言貧甚。去歳鬻七歳女子。今已食盡。願去竟不至。密陽人有與行中下人。同姓五寸親者。亦約束不至。皆言關白出令。申飾各州

各防。使者已再過云。曽在江戸時。率一漢而来。至此迄去。極可痛憤。」とある。前掲の重宗の十九日付の書翰もこの日に京都からようやくに届いている。日本の官史のすげない返翰と、他郷に土着化した伊達の事情とを合せ思う、信使の痛憤に耐えられない、やり場のない傷みが行間から伝わってくる。

右のような、刷還交渉の難航する中で、食饌を届ける公務の使者に従って出かけ、その後、ややくだけた半公式の場で丈山と権伎との筆談・唱酬は成立しているのである。

当事丈山は市隠の身の上である。すなわち、寛永十三年、病気養生のために有馬温泉に出かけると称して、広島から京都へと居を移している。その前年の寛永十二年に母を喪い、浅野公へ致仕を願い出たが許されなかったのでこの挙に出たものという（『東溪石先生年譜』人見竹洞編）。それは、寛永十三年三月初旬のことであったことが確認されている。[10] なお、十四年間奉公した浅野家を出奔に近いかたちで去るについては不明瞭な点を残すが、『筆語』⑦に、老母と死別後「辞官顛禄抱病致仕、方今隠洛汭、以歌考槃、所以一生不觸女色無有妻子、行李蕭然乾坤一浮客、何地不遊哉」と権伎へ隠遁の楽しみを語っており、致仕の理由は『年譜』にいう通り「退隠之志」を果したものと考えてよいであろう。

ところで『年譜』寛永十四年の項に「公五十五歳在二京師一ト二居相國寺之側一」とあるが、これは『覆醬續集』巻十一〈與林羅山〉に「丁丑之夏於二萬年之傍一卜二居一區之居一修二環堵之室一安二微眇之身一」とあって、権伎との筆談より後のことに属する。だから筆談をした頃の丈山は、この書翰に対して羅山が無音の謝辞に「嘗聞足下歸休不レ京洛不レ江湖隨レ所レ適而市隠」（〈示二石川丈山一〉『羅山文集』第七）と書いたような、いまだ居を定めず遊歴している時期にあったと考えられる。

では、そのような「市隠」の身の丈山が、半ば公式の場に出かけることになったのは、同じく三河を故郷とする板倉重宗の要請のようなものがあったかと想像される。徳川幕府はその成り立ちが三河松平家を中心に、本多氏、鈴木氏、高木氏、戸田氏、板倉氏といった石川丈山にごく親しい一族を家臣団にもつている。中で板倉氏は重宗、重昌とも丈山や鈴木正三といった隠士らと密接であったことは知られる通りである。この四、五年後に丈山は詩仙堂を築き、その後三十年にわたって詩三昧の隠者生活を営なむのであるが、その造築費などどこから得ていたのであろうか。それまでの蓄財はあったにしても、三河の石川氏一族、あるいは重宗らの庇護を想定しなければ丈山の隠者生活は成りたたないと思われる。仮に俳諧の宗匠なみに詩の添作、あるいは『覆醬續集』巻八などに見える碑銘の類を撰述したりの謝礼などがあったとしても、それだけでは隠者たりとも生活の糧にはなるまい。また、食邑のごときに生活基盤を持っていたとして、なお彼の三河武士という出自と家康に若年に近仕した経歴が隠者生活にも尾を引いていたことも事実である。『覆醬集』に見える幕府側官吏との交遊は、単なる雅交にとどまらないのではないかということを想像させるに充分である。

隠者とは精神生活の自由の上に成り立つ。そのような精神生活の自由は、日常の拘束から離れた、生活基盤の自立したところで保障されるだろう。丈山が、重昌の斡旋を受けて十四年間勤仕した広島の浅野公のもとを、許しを受けないまま致仕したのは隠者への責極的転身であって、そのような身の上を求めたからであった。

野間三竹が「聘君石六六山人行状」に「閑淡寡欲而不下與二凡塵一伍上。雖二一袭一葛一未三敢取二于人一。遠志高識殆忘レ世忘レ物嗜レ學如レ渇。杜レ門唔咿。四十年来不レ接二俗士一不レ問二俗事一其所二相交一者僅六七人……公久居畝之間一常忘二濁富一而甘二清貧一」と記した丈山の生活はほぼその通りなのであろう。事実、『覆醬集』『新編覆醬集』を合せみても雅交の相手は江戸の羅山、鵞峰、讃耕斎をはじめとして、医師の武田道安、蒙安、杏仙、辻了的、尾張の堀杏庵、野間三竹、同じ京都の松永昌三、あるいはそれぞれの一族・門人たちといった人たちが主であって、あとは時折詩仙堂を直接に訪れる僧文人などがその範囲である。趣味と贅沢の極を尽した詩仙堂の凸凹寞十二境の屋庭で、童僕を侍らせて月、花を楽しみ、食に貧窮するといった心配のない隠棲が営なまれているようだ。つまり、官途を遁れて隠者の生活を確立した上で、なお、雅交という形で官吏との交遊は継続されていた、というのが実情であろう。板倉重宗はまず別格として、都築吉保、今枝民部、青木遠江守、本多内記、野中伯耆、永井日州、加藤勿斎、戸田采女などという武士に求められて銘を撰ぶといったこともあった（『覆醬續集』巻八）。

すなわち、のちにこのような隠者生活にならざるを得なかったのは、同郷の重宗らとの密接な交遊に起因していると思われる。

このような交際は、丈山が広島から帰京して「市隠」となったまもない頃からはじまっているわけである。これに加えて、丈山自身にも通信使と筆談・唱和を通して、自らの詩のほどを試みてみたいという気持があったようである。こうして、広島時代に書きためた詩稿「二百餘篇」を「舊詩一巻」（『筆語』⑨）にまとめて、信使の還りを待っていたと思われる。それは『覆醬集』にまとめられる以前の「毎有興趣、一咏一吟、楽心於其中」のものであった。

三　自筆原輪「與朝鮮國権學士菊軒筆談書」

丈山と権伎との筆談の自筆原輪は、現在静嘉堂文庫に大型の折本一冊として所蔵されている。内題は丈山筆の隷書体で「與朝鮮國権學士菊軒筆談書」と記されている。表紙には「日本丈山石川生□鮮學士菊軒問對帖」と別筆で記されている。

これにはおよそ四十篇の筆談が順次貼布されている。寛永十四年一月十八日の筆談（私に番号）①～㉛、翌十九日の書輪による贈答㉜～㊱、および後に付け足された丈山の跋文㊲がその全てである。㉜～㊱は、権伎のやや小型の野入りの便箋が用いられている。墨蹟あざやかに、筆談の興奮がしのばれる。その原輪をほとんど忠実に、行移りまでそっくりに、刊行したのが前掲天和二年版『丈山筆語』である。これには丈山の跋文はない。『新編覆醬續集』巻十六（延宝四年刊）は、同じく原輪に拠るけれどもこちらは跋文も収めている。ただし両者とも措辞に若干の異同が認められる。

この跋には次のように成り立ちを記す。

……啻記取會次之風概、以為文戦之微矣耳、木投瓊報亡慮四十篇、為好事者装褫巻軸、藏諸詩仙堂之芸巣、後之覧者可為咲談之一助。

戊寅仲夏望日

参陽隠夫石川丈山跋

寛永十三年丙子十一月朝
鮮國貢獻三官使通政大夫
修撰同任命鋼訓大夫編修
官金命濂通訓大夫記注官
黄床之屬來朝而道於東武
臻極歲丁丑正月中旬還京
師館于本國寺余慕誠其才
識所而謁候焉英徒有中直
大夫詩學教授權學士居出
而與余臚對矣展禮座定互
依毫紙目通情題學士怕發
操筆詞鋒如飛辯論如流丁
真亦草臥瀾蘇潮來多讓矣
可謂希世之逸士也裏之信
使到東都時羅浮氏又書詰
問三韓之風俗六經之難疑
彼以國濃來敢當爾故余此
行也來設難問書記取會次
之風躰訊無忌敢之徵矣其
本根瑣報之靈卯十篇裝好
事者裝禁卷軸藏諸詩仙堂
之茶巢後之覽者可無咲談
之一助

文寶聊更望四

參陽隱夫居士丈山跋

A　丈山自筆「與朝鮮國権學士菊軒筆談書」跋文（静嘉堂文庫蔵）

印（頑仙子）（詩仙堂）

これは、もと筆談でやり取りした料紙を「文戦之徴」として巻軸に装裱して、詩仙堂の猟芸巣（いわゆる詩仙堂の東隣りの読書室、至楽巣ともいう）に収蔵したものという。丈山にとって記念すべきものであったはずだが、いつの頃にか詩仙堂を離れ、現在のような折本に仕立直されたものであろう（写真A参照）

ところで本書は、丈山の跋文の日付に問題が残る。「戊寅仲夏望日」とは文字通りでいけば寛永十五年五月十五日をいう。しかし、この時点で現在のような詩仙堂はできていない。詩仙堂の築造については、正確に年次を定め難いが、『年譜』その他を合せ考えて、寛永十七年着工、十八年秋落成、いわゆる探幽描くところの三十六詩仙図の完成は同十九年といったところであろうか。仮に別の詩仙堂があったかと疑ってみると、相国寺の側に卜居した睡竹堂、または学甫堂（丈山文庫パンフレット）あたりが想定されるけれども、猟芸巣というからには、現在のそれをさすものと思ってよかろう。また、この隷書体の文字も、方形の違いワクに「頑仙子」、二重輪に「詩仙堂」の印も見おぼえあるもの、しかも筆談の内容、筆蹟とも原翰と認められる。すなわち日付のみが疑がわれる。その理由はさまざまに考えられるが、筆談を記念として残したいと考えるに至った時期の日付を、裱装した際に記したものか、と今は考えておきたい。つまり、現在の詩仙堂成立後に跋文は撰ばれたろうと思うのである。

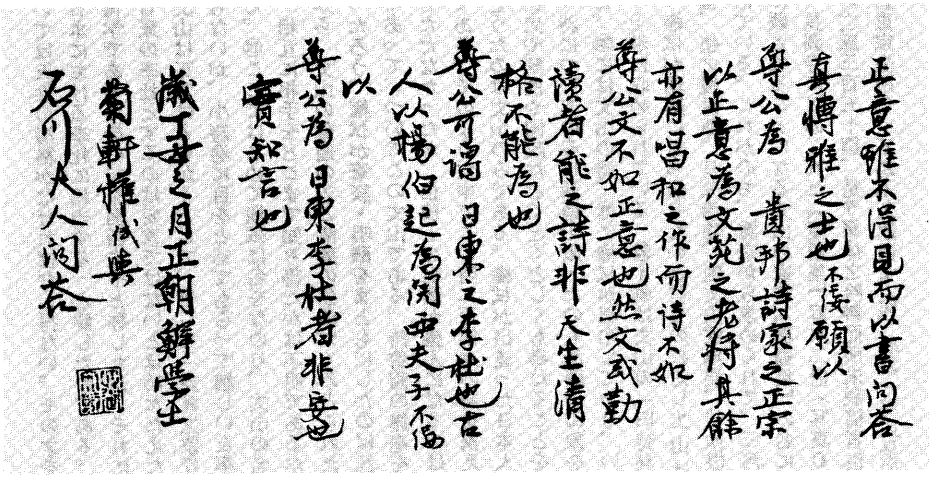
原翰と『續集』および『筆語』の本文との異同は異体字や日付、署名、宛名などの有無などで内容にかかわるものはほとんどない。原翰に対して『續集』『筆語』とも同程度の異同を示しているが、校異のいちいちについては別稿を期したい。

筆談は①丈山の海陸万里を越えて東武まで出向いた通信使への労をねぎらう挨拶に始まる。③三使君に従って貴邦に入り風俗を見たいが国制が許さない。あなたは国境を接する明に行き、孔孟の遺風・聖跡を見たことがあるかの質問に、④権伎は自分は若年から壮遊の志をもって名山大川を探り、鄒魯の郷もたづねたが、日本へ来て、しかも貴公と会えたのは幸いであると応じた。⑤丈山はさらに遠遊の志をつげ、もし三韓へ行くことができたらあなたは待っているのか、の問に権伎は⑥「各天異地往来無便、尊公未知縁何得到我邦耶」とその現実を知らしめる。⑦丈山は老親に死別して致仕し、洛陽に隠遁の生活をしている自分はあなたを欺いてかく言うのでないことを述べると⑧権伎も杜甫の「親に死別してすでに親元へ遊行すべき恋著心もなく、どこへ行こうとよい」（「将適呉楚留別章使君留後・兼幕府諸公、得柳字」）の詩句はかえって悲痛の辞だと同感し、自分は七十歳の老親を抱えながら公務とはいえ東西に奔走して忠孝は全うしがたいと述べる。これを端緒に丈山と心が通じてきたと思われる。

⑨丈山はここで、これまで書きとめてきた二百餘篇の「舊詩一巻」を取り出して権伎に批評を乞うた。⑩権伎は目を通して「意圓而語新、法古而格清」と評し、一胥を過す珍翫としたいという。また「大概三百篇之後、惟唐人得詩家之風韻而宋元以下雖謂之無詩可也、貴作出入古今、直與大暦諸家互為頡頏」とつけ加えている。これらの評はすでに丈山の詩が盛唐詩を規範にしていることを看破した上での言であることまちがいない。社交辞令があることは当然と

して、丈山の『覆醬集』にまとめられる以前の詩も、その出発点において、すでに唐詩風であったことを確認できる。権伓の評言も『滄浪詩話』やそれらを含む『詩人玉屑』の詩法や詩評にすでに散見するもので目あたらしいものではないが、丈山にしてみれば権伓の評は大きな支えになったようで、後にも「唯盛唐ヲ學ブベシ。宋詩ハ気格カ高キユヘニ學ビカタシ。唐ハ温純ニシテ圓活ナレバ學ビ損シガナシ」(『北山紀聞』巻一〈詩教〉)のようにくり返し説いている。丈山の盛唐鼓吹については拠りどころとする詩論との関連も指摘された論があるのでここでは省略する。[11] ⑪丈山はさらに添作を求めたが、⑫権伓は貴詩は私の鄙言を待つまでもなく輝いていると郢正をさけた。ところで『北山紀聞』巻六〈詩評〉に「朝鮮國詩學教授権敬批點として〈閑中ノ吟十五首〉が出ている。あたかもこの時のもののように点と評言が書かれているが、小川氏も指摘される通り、[12] 寛永十七年以後の詩、同十九年、二十年の詩が入っており、明らかに権伓の批点したものではない。『紀聞』自体今後検討されるべきで問題を残している。

ここで権伓は江戸で唱和した羅山について尋ねている。丈山は⑬羅山は自分が昔から雅交する人物で、我国の儒宗であること、さら儒医堀正意も文章に工なる当時の英才であることを告げる。つづけて、⑭近代詩は晩唐以後の詩に基づき、古律古風を好み読む者は少ない。だから奇新・深遠の幽趣に通暁するものもほとんどない。詩が興隆しないのも当然であると抱懐するところを述べる。そして蘇軾の「賊詩易事観詩稍難」の言を引いて権伓に詩を観る精・微なる眼力を持つかといどんでいる。続いて「詩感於物而形於言、所感有邪正、所形有是非、邪正是非顕然乎詩中如見肺肝、則情正之美悪亦



B　朝鮮学士 菊軒 権伓自筆原翰（静嘉堂文庫蔵）

何以獲覆蔵哉」と、この当時に共通する宋学流の修道的詩観を述べている。これに対して⑮権伝は次の様に言う。

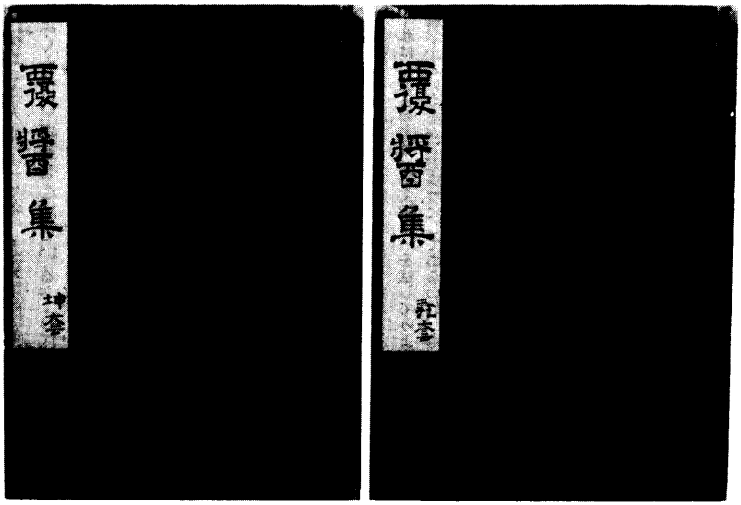
正意雖不得見而、以書問答、真博雅之士也、不佞願以　尊公為貴邦詩家之正宗、以正意為文苑之老将、其餘亦有唱和之作、而詩不如　尊公、文不如正意也、然文或勤讀者能之、詩非天生清格不能為也、尊公可謂　日東之李杜也、古人以楊伯起為関西夫子、不佞以尊公為　日東李杜者非妄也、實知言也

歳丁五之月正朝鮮學士菊軒権伝與

石川大人問答　　（　印　）

この権伝の言が、丈山が「日東之李杜也」と評された最初のものである（写真B参照）。まずここで羅山がふれられていないのは、前述したように江戸での権伝らとの筆談において極めて印象の悪いものを残しており、しかも唱和の詩に見るべき点を認めていないからであろう。判事官の康遇聖は寛永元年の通信使としても来朝しており、羅山がその時も代表格で筆談に出ていた事は記憶していたはずで、羅山についてはすでに朝鮮にまで芳しからぬ評が伝っていたものと思われる。堀正意とは旅中書翰で質問に答えている。『杏陰集』巻十〈疑問五條與朝鮮権學士〉というのがそれで、賜爵、亀卜、國基、喪、禄位などにつき細密な質問をし、また簡明の返答が記されている。儒医らしく〈疑問二條〉を加えて薬草、処方などについても質問している。ここらが「博雅之士」たるゆえんのものであろう。この正意を「文苑之老将」とするならば、丈山は「貴邦詩家之正宗」と並置する。また、文章はよく勤めれば成るけれども詩においては天性の清格がなければなし得ない。その才をもって丈山を「日本における李杜に相当する」と評したのである。また古人は清廉博学であった楊伯起を関西夫子と称したが、それに比しても丈山を日東の李杜とするのは妄言ではないとほめたたえたのである。

⑯丈山は正意はともかくとして、自らを「詩林之宗匠」とするのは当らないが、小詩巻に目をとめてもらって嬉しいと率直に感謝している。⑰ここではじめて権伝は名をなのり、丈山の名と経歴を尋ねる。相互に相手をどこまで知り得たかは不明であるが、「舊詩一巻」から、丈山の隠遁の志と清廉の生活がくみとられたことは確かであったろう。権伝が筆談・唱酬をまともにしたのは江戸の羅山ぐらいであって、ついでこの丈山である。詩書画の揮毫を求める者はあとをたたなかったが、信使との唱酬が盛んになるのは天和以降のことである。そのような中でこの時二百篇余の詩を携えて批評・添作を乞うたのは丈山のみである。権伝が出逢った日本人の中で丈山は、歴史や制度や国政などくどくどしくも尋ねることをせず、隠者らしく詩についてのみに話題を限ったのも清廉の印象を残すことになった。⑳には丈山の詩、㉑に権伝が唱和しており、いづれも『覆醤集』上巻に収められている。㉒〜㉛は丈山の「旧詩巻」をめぐる話で、権伝が朝鮮にもち帰りたいと言うのに対し丈山は「然則皈貴國、使之覆醤瓿、日昃涂修、嗟丈夫匪無涙、徒飲恨耳」と返却を求めている。これがのち、重宗から求められて、三河旛頭郡の長圓寺に蔵されることになる丈山の家集『覆醤集』の名に及ぶものである。長圓寺に収められた『覆醤集』写本二冊（写真C）には「右二套詩亡慮三百五十篇、是予稾体之吟艸而所未脱稿者也、雖然為京君板倉重宗公所匂、不為不久欲罷不能、既寫一局以呈似、不佞素有



C　長圓寺蔵 写本『覆醬集』

所學者、有所楽者詩其餘也、烏遑打油丁鉸之譎為哉／承應二年壬巳仲夏中澣日／詩僊堂主小隠丈山跋　印（六六山洞／凹凸窠生）（頑仙子）」と丈山自筆の隷書体の跋文がある。権伐に見せた「舊詩一巻」には、たとえば「白鷗不レ停二野水一」（元和四年）「元和癸亥八月十四日夜與二為春友淵一借見二月金閣寺一」（元和九年）あたりの詩が入っていたと思われるずが、旧詩の中からも『覆醬集』には撰ばれたものが多いであろう。かくして『覆醬集』は承応二年（一六五三）に成立し、下って寛文十一年（一六七一）に刊行されたわけである。筆談の記憶が深くこめられた詩集であった。

㉜～㊱は翌一月十九日の書翰による贈答である。㉝権伐は「題大拙翁詩巻」という詩を添えて丈山の「舊詩一巻」を返却してきた。それにたいし㉞「承権學士菊軒詩伯題予小詩巻光誦之末以充陽関之乙唱」と送別の辞を賦している（いづれも『覆醬集』上巻にも所収）。

㉟㊱は最後の贈答で、丈山の稿書を謄写して残したことを記し、また短い出会いに謝辞を尽している。これが筆談・贈答の全てである。

十九日朝食後、通信使一行は京都を出発した。淀浦には雨の中を楼船が待ち受けていた。降りしきる雨のために下陸せず、船上にて饗応を受けた。金東溟は『海槎録』にこの時のことをこう記している。「――右馬助、藤智縄が来て言った。淀浦の代官は親しく宿駅より出でて誠礼を尽しています。下陸を承知しないため彼の落莫たる気持をいかんともしがたいと。……康遇聖に命じて代官に雨甚しく下陸することができないという詩を贈らせた。代官は詩を得て頭をさげ、今日この詩を得るとは思いもかけませんでしたと言った。

――」と。その詩はおそらく『覆醬集』巻上に出る金東溟の〈奉謝二淀城永井公一〉であろう。「春江漠々白鷗飛。両岸楼臺厭二翠微一。総為二主人能敬一レ客。五更風雨欲レ忘レ帰」は この日の情景をよくうつし謝意をこめている。〈代二某人一追二和朝鮮国信使東溟所レ寄詩一〉と題する二首は、淀での饗応を担当していた永井信濃守尚政に代って丈山が追和したものである。信使の詩を得た尚政は丈山に示し、追和の詩を依頼したものであろう。「遠望二北客一報二書信一」と言うから、たぶん東溟のもとへ届けられはずだ。丈山がこの時尚政に随行して淀に来ていたかどうかは不明である。

朝鮮の通信使は丈山の隠者生活のそれからを詩三昧の生活へ導かせる大きな力を与えたようだ。『覆醬集』下巻〈賡二都築氏両韵一〉の叙に次のような回想を残している。

――私は、彼らの文芸（詩文学才）を試してみようと思って出かけたところ、詩学教授権学士という者が衣冠厳整にしてあらわれ、もっぱら応答した。私は訳官というふれこみで紙筆をとって対話に及んだ。まず朝鮮からの高里の筆をねぎらい、ついで三韓の風俗の違いなどについて問うた。学士は遂然として敬意をあらため、両手を拝して感謝の意をあらわした。互に相手を見て、心情を通わせ、筆談はなかなかつきなかった。都鄙中の者が首をのばし、人がきをなして熊論に見入った。彼は詞才をめぐらすこと敏速で、文藻は湧き出るが如く、わが国の学徒のとうてい及ぶところではなかった。いったい誰がその筆鋒に応じられようか。時に都築（治左衛門吉保）氏も一座にあって即興に一絶を賦し、併せて春初の詩を書きつけた。私はこれを整え写して学士に示した。すると学士はさっと目を通すや、思いめぐらすまでもなく、無言で和した。その詩はまるで前から準備されていたもののようにエ妙なものであった。この後、学者、儒官らが韻を庾ぐこと多かった。私もまた、昭和すべき責任もあったわけだが、ぐずぐずとして果し得なかった。その後六たび蟹の飛ぶのを見た。この数年の怠惰はただ私のおろかさを意味するのみ。今ここに両韻を賦して、あの時の詩債をかく償うのである。――

この叙のあとに七絶二首、筆談から六年後の寛永十九年の夏、五十一歳の丈山はすでに落ちついた詩仙堂の中で、筆を揮って問答した旧時の春を憶いやっている。権伝および文官たちのことは印象に深く残ったらしく「……通事ノ者ニヨリテ筆談ス。折斤一首即和ス。其ノ外衆人ノ即和ヲ見ルニ。筆実ニ不レ滞七歩八叉ノ位ナリ。詞鋒ヲ争ンヤウナシ。本朝ニハ何ト達者ナト云テモ及ブベキ人アラジ」（『北山紀聞』巻二〈詩話〉）ともいう。相互に対等な国際語ともいうべき漢詩文の唱酬において、すでにレベルの違いのはなはだしいことを充分に知らされている。そしてその違いを生ずる理由を制度の違いによると言う。「三韓ニテハ學士ヲ極テ達者ヲスル者ハ。官階ニモ登リ其用ヲナス。本朝ニテハ慰ミ事トナル。実ニ用ヲナサヌヘニ修業スル人モナシ。隠者出家ノ慰ミ物ニナレリ」と。ここにはなお、詩文は功利的に活用されるべきとする考えが表われている。文は道の末、貫道の器（『紀聞』巻一〈詩教〉）とする朱子学的な文学理念がその底流にあり、この時代共通の認識から出ていない。この認識が「慰ミ物」としての自立をなかなか許そうとしなかった。

丈山の隠遁は、官途をのがれるという強い意志によってなされた脱俗である。その意味で、生涯をかけてなされた詩文は、彼において有用のものとして機能しなかったというのも当然のことであろう。しかし、だからこそ丈山の詩は、時代の理念から離れられないまでも、「慰ミ物」でありつづけ、それの自立をうながす力を養いつつあったと思われる。

詩仙堂とは、一つには長嘯子の歌仙堂に対する徳川文化圏の象徴[13]といった文学空間的意味を持つであろう。同時に、次の世代の人び

とへは、幕初期文学の理念と隠逸への志向が生み出した「慰ミ物」の中に、文学のあるべき原初のすがたともいうべき何かを感じとらせていたことも事実であろう。ただし、それは丈山の営みを結果からみたものであって、筆談時における権低ら俘擄刷還の使命などおびた朝鮮儒者と隠者という身軽な身の上において、詩の場が一つに成り立ったというのは、なお、道有りて文有りとする宋学的文学理念が共有されていたからにほかならないであろう。その上で感銘を分ちあえたと思われる。

四、隠者へのあこがれ

上野洋三氏は、延宝末年から天和・貞享期の俳諧に見られる漢詩文調の流行を、詩話・作法書、選集・家集などの出版の具体的背景に見合わせ、芭蕉俳論なども含めて、詩の「俗化を伴った」流行の影響下にあることを指摘された。そして詩の流行をうながした契機として、幕初以来の朝鮮通信使の来聘も一因としてあげられている。[14] その文化的刺激は想像以上であるようだ。

天和二年の網吉襲職のための通信使は四七五名の一行で、八月二十一日に江戸に到着した。ことに賑った道中である。『通航一覧』巻百八には「かの使者来聘ごとに、必筆談唱和あり、天和正徳の頃よりして、その事やゝ盛なり」と記す。前掲の〈こがらしの〉の巻

かしらの露をふるふあかむま　重五

朝鮮のほそりすすきのにほひなき　杜国

の付句は、通信使往還を見た者の抱くイメージといってよいであろう。[15]「道広く朝鮮人も来と也」（『七百五十韻』）は鳴海の如意寺の僧文英和尚、号如風の句である。このような雰囲気の中から「日東の李白が坊に月を見て」の句も自然に口を衝いて出たものであろう。天和二年刊の『丈山筆語』が目にふれていたとしてもおかしくはない。まず丈山は三河の人であるからだ。また、芭蕉の『次韻』『虚栗』の調子を理解し受け入れるだけの、のちに蕉風形成の機として記憶される『冬の日』五歌仙を生みだす素地も、尾張俳人にはあったのである。蕉門俳人には素堂、丈草ら漢詩好みが多い。支考『笈日記』下に『覆醬集』巻上〈九月十三夜入二吉田氏家一玩二月池亭一〉をふまえた文があり、『芭蕉庵小文庫』下には、詩仙堂を訪れた芭蕉、丈草の句がある。杜甫や西行だけでなく、長嘯子や丈山ら一世代前の隠逸詩人たちへの憧れの一端がうかがえる。[16]『扶桑隠逸伝』『本朝遯史』（寛文四年刊）『本朝列仙伝』（貞享三年刊）さらに『近代艶隠者』（同年刊）らの類は、近世初期の隠者たちをも神仙化・象徴化した。「日東の李白」もその雰囲気の中で、「花葉の翁」などと同じく、あこがれのこめられた、言葉において結ばれた隠者像であった。「詩は隠者の詩、風雅にて宜（し）」（『三冊子』）という素堂の言を芭蕉も心にとめている。先輩隠者とその「慰ミ物」に、貫道する風雅の精神の理想を、すでに見てとっていたようである。

注

1 小川武彦「石川丈山年譜稿　上」（『跡見学園女子大学紀要』十四号、一九八一・三・一五）に国立公文書館蔵本の報告がある。

2 『通航一覧』巻六十四朝鮮国部〇信使着館并滞留中御扱に掲げられた「紀年録」「槎客使覧」「朝鮮往来」「玉露叢」などの記事をまとめれば次のようになる。

寛永十三年（一六三六）年来朝通信使一行

正使	通政大夫 任絖（白麓）
副使	通訓大夫 金世濂（東溟）
従事官	通訓大夫 黄㦿（青丘・浸浪）
上上官（譯官）	嘉善大夫 洪喜男
〃	折衝大夫 姜瀚浙
判事官	中直大夫 康遇聖
〃	奉正大夫 李長生
〃	奉列大夫 尹大銑
武官	中直大夫 朴弘耉他一六名
読祝官（製述官）	中直大夫 権侍（菊軒）
写字官	文弘績（白眉）
	全栄（梅隠）
	朴之英（西湖）
執事	趙廷珖
〃	皮得忱
唐通事	尹廷羽
〃	朝彦協他一名
医員	全明國（蓬瀛）
画員	洪亀元他五名
楽人	

右のように正使、副使、従事官各一名、上上官二名、判事官三名、上官四六名、中官一五七名、下官二六七名、総計四七五名であった。そのうちには、学士一名、医師二名、写字官三名、画官一名、馬芸員二名、馬医一名、楽士六名などを含む。

3 中村栄孝『日朝関係史の研究』（吉川弘文館、一九六九・一二・二五刊）下巻に詳しい。また、同『日本と朝鮮』（至文堂、一九七三）、同「江戸時代の朝鮮通信使」（『江戸時代の朝鮮通信使』毎日新聞社、一九七九・一二）、李進熙『李朝の通信使――江戸時代の日本と朝鮮――』（講談社、一九七六・六刊、もと『李刊三千里』一～九に連載）、同『日本文化と朝鮮』（日本放送出版協会、一九八〇・一刊）第六章など。通商関係については田代和生『近世日朝通交貿易史の研究』（創文社、一九八〇・六）などに詳しい。

4 『海行摠載』巻二・三所収（朝鮮古書刊行会編、一九一四～一九一六刊、朝鮮群書大系續々第三～六輯）。

5 『通航一覧』巻百四「執政附溜詰君儀并諸向三使贈答」所収「……且念前此使臣之回、刷還本國俘口、已有成例、向者貴國雖以歳久折居為難、尚有括送百数十人、則今之在者、亦豈無楚吟越聲之思者乎、我殿下仁心惻怛、不忍忽爽、非以是而為有滋於見戸也、貴國信義明白、必無間無、故敢申例…」などの様で、板倉へ出されたものもほぼこれに準じられるかと思う。

6 大瀧晴子「日光と朝鮮通信使」（『江戸時代の朝鮮通信使』前掲所収）。

7 注6参照。

8 通信使の旅程と日本人の接待については、享保四（一九一七）年次の甲維翰の『海游録』（東洋文庫に翻訳がある）をもとに、旅行のコースを綿密に踏査された李進熙『李朝の通信使――江戸時代の日本と朝鮮――』（講談社、一九七六・六刊。『李刊三千里』1～8連載）が当事の情況を伝えてくれ、参考になる。

9 李元植「朝鮮通信使の遺墨」（『江戸時代の朝鮮通信使』所収）。

10 小川武彦「石川丈山年譜稿」上（前掲）に『玄徳公済美録』巻七を引いて考証されている。

11 松下忠『江戸時代の詩風詩論』（明治書院、一九七一・六刊）、中村幸彦「石川丈山の詩論」（『中国古典研究』十九号、一九七三・一二）。『近世文芸思潮攷』所収）。

12 「石川丈山年譜稿」上（前掲）。

13 前田愛「衆道の詩仙・石川丈山」（『歴史と人物』一九七一・八。『幻影の世界の映像』所収）。

14 「詩の流行と俳諧」（『文学』一九七三・一一）

15 天和二年春の〈花にうき世〉の巻（『虚栗』）「破蕉誤ッチ詩の上を次ゲ〈風雪〉／朝鮮に西瓜ヲ贈る遥ナリ〈芭蕉〉」は、信使を迎える前の江戸の喧騒が背景にあろうか。また『野ざらし紀行』（真蹟本）〈醒和の句〉に「小僧ふたりぞかしこまりける／朝鮮のゑかきにならの酒をくみ」の句も実景であろう。

16 堀信夫「『本朝蕉史』と俳諧隠者」（『武蔵野文学』24）に蕉門俳人の隠者志向について指摘されている。広田二郎「近世初期漢字と芭蕉」（『日本漢文学史論考』一九七四・一一）には丈山らの芭蕉への影響を論証されている。

〔付記〕本稿をなすにあたり種々御教示いただいた中村幸彦先生、上野洋三、大橋正叔氏、資料につきお世話になりました中野三敏、神谷和正、日比野純三、園田尚弘、園田豊、服部仁の各氏、および静嘉堂文庫、長圓寺に深謝申しあげます。